

あんぜんの 安全

月一回ないし二回刊行予定
創刊前に数回準備号を発行します

準備号 3

あかりとあかし

‘05/2/28

NPO法人 安全学研究所

〒190-0012 立川市曙町 2-42-23 アーバンライフ立川 614

Organization of HOLONOMY

Tel -Fax 042(521)2988

Email: holonomy@aa.bb-east.ne.jp

URL: <http://enjoy1.bb-east.ne.jp/~holonomy>

<安全理念と文明と経済と>

理事 津熊二郎

日本ではデフレ経済により景気が低迷悪化し、大企業は勿論、規模の如何を問わず多くの企業が、超優良企業と言われ直近決算で利益を上げている企業でさえ、リストラを進めている状況が続いている。この現在のデフレもあくまでも経済の、循環経済の一現象であるとして、日本は中国や東南アジア等のマーケットで、その国際競争に打ち勝つ巨大企業同士の合併を実現し将来の経済成長に多くの期待をかけようとしている。

新聞や雑誌で窺えるところでは世の中の多くの人々がこれらの問題を資本主義経済の現象に過ぎないと捉えているようであるが、根本的な問題は「経済の」ではなく「文明の」現象であるという認識の欠如にあると思われる。それぞれの現象をある条件下に限定して細分化し、機械論的、還元主義的に原因結果を究明しようとする科学的方法論ないし手法の越権的な過度の適用こそ反省されなければならないであろう。そこにこそ、文明論の欠落という本質的問題がみられるのである。

デフレはインフレ同様、需要・供給バランスの不均衡であるが、科学技術特にコンピュータの発達による生産技術の革新が、世界的に供給を飛躍的に増加させ、デフレを進展させることは容易に想像できる。まして先進諸国だけでなく現在発展中である中国や後進国による生産力の増大が加わり、世界規模でマーケットの拡大が不能化もしくは鈍化してしまうことを考えれば、果たして循環型経済と楽観視しつつけることができるであろうか。

リストラは本来経営資源の再構築の意味であり、事業発展の可能性のある分野に経営資源を集中することであるが、日本ではもっぱら人員整理の意味に使われている。アメリカ型経営が流行的に評価され、農耕中心の村社会から幕藩体制を経て成立してきた共同 <次頁左欄へ>

<安全学と Homeland Security について>

監事 石上麟太郎

21世紀初頭におけるアメリカ合衆国の最大の国家プロジェクトは、ホームランド・セキュリティ(Homeland Security)であった。9・11同時多発テロを契機にアメリカはテロ対策に力を注ぎ、その規模はかつての「アポロ計画」にも匹敵するものであるという。

ホームランド・セキュリティとはテロによる攻撃に対する防衛、ダメージの最小化、回復を目的とするもので、主権国家としての独立性を守る国家安全保障(National Security)や敵性国家に対する軍事的措置である国防(National Defense)とは概念を異にする。

いつ何処で発生するか分からない建造物等の破壊、生物兵器の使用、サイバースペースへの攻撃等、これらを未然に防ぎ、また生じた場合には被害を最小限に抑さえ、すみやかな復興をめざすための官民共同の様々な施策がホームランド・セキュリティである。

ホームランド・セキュリティの目的は対テロであるが、副次的な効果として、自然災害や未知の感染症の蔓延の防止等にも有用であることが判明した。緊急事態宣言が発令された2003年9月の超大型ハリケーン「イザベル」の対処において、ホームランド・セキュリティとして事前に準備・訓練されていた人的・物的な資源がそのまま投入され、災害による損害の発生を最小限にし、かつ速やかな復興に多大な貢献があったのである。また、未知のインフルエンザの流行についても、細菌兵器テロの対策がそのまま役立ち、全米に蔓延する前に適切な対策をとり抑圧することができたのである。

このように、従来の警察や軍のみではなし得な <次頁右欄へ>

1面 <発刊によせて>理事	5面 古希虻の途方に暮れている日々
2面 " (続き)・ミニ辞典	6面 " (続き)
3面 解題<あかりとあかし>	7面 活動報告
4面 蛇と蜂同士のこの種の辯論的争い	8面 お願い、所在地、編集後記

組織体としての日本の企業組織が崩壊し、バラバラの個人が残され、成果主義評価も自己責任の問題として片付けられるとともに、自利中心の大人や若者が増加しているのも、当然のことといわねばならないであろう。昨今の日本社会の病態は重篤であるというのも、国家はもちろん社会や家族さえ崩壊へと追い込まれているからである。

個々の現象事象として時代毎に異なった形態をとりながら歴史的な進展を刻んできたリストラや貨幣経済とともに古いデフレに加えて、科学的技術に負うところの大きい今日的環境破壊等の問題がすべて同根であるばかりでなく、実に支配的文明の総決算を強いる歴史社会的な根本的安全問題と同根なのであることは準備号1号の小堀先生のご寄稿にも明らかである。

生類がこの地球上で生存してきたことは容易ではないが、人類は自然との古い深刻な格闘を通じて農耕、工業、科学を発展させてきた。現代において巨大な生産力や狭い意味でのいわゆる自然を変え得る力を持つに至ったが、物質主義ないしその背景にある欲望中心主義からさらには数量化された経済至上主義の背後に存在する人間の食欲もしくは渴愛の批判的認識にもとづく文明的反省を強いられているように思われるが、物質主義である点において、資本主義と共産主義は共通している。

「汝自身を知れ」という真理の言葉を通じて人間の自己自発の存在意味の自覚からの諦念に至り、悲を知りてよく生きることがひとつの反省の境地であろうか。そこでは燃灯仏は恐れ多くとも、面を俯せることなく目を見開いて、仏に向かうことが出来そうである。

脚下照顧の賢人政治、賢人経営がより求められている時代と思われる。 ❖

かった社会における脅威を鎮圧して安全な社会を構築することに大きな成果を挙げたのである。

2003年1月に国土安全保障省(DHS:Department of Homeland Security)が誕生し、同年3月には同省に8省庁22の政府機関、部門が移転統合し、職員約18万人、予算約4兆円の巨大な連邦政府機関となり、過去50年における最大の連邦政府の組織改革となった。そして民間企業のホームランド・セキュリティ関連の産業の市場規模は約10兆円とも言われる。

このように、同時多発テロを契機としたものであるが21世紀のアメリカ政府が一番力を注いだものが、「安全・Security」であったのだ。

ひるがえって日本をみるに、安全対策は内閣府を中心とする、総務省、警察庁、防衛庁という縦割り行政で、DHSのような機関も概念もまだ無い。

しかし、先日(2月1日)同時多発テロでは復興の陣頭指揮を取った元ニューヨーク市長のジュリアーニ氏が来日し、小泉首相や経済界の人と会談し、ホームランド・セキュリティの重要性を説いて帰った。

安全学研究所は20年近く前から活動をしてきたが、当時の日本社会は安全というものに多大な労力や費用をかける意識は低かった。だが、時代は変わり、アメリカのホームランド・セキュリティの概念が浸透して行くにつれ、「安全」が日本社会の最重要課題となっていくであろう。

安全学研究所にとっては今こそ旗を掲げての船出の時であろう。 ❖

ミニ辞典—安全と安心:「安全と安心」とか「安心と安全」と組合せて使われることが最近多くなっていますが、二つの語の関係について、

①「安心してしまおうと安全は確保できない」と両語を相容れない矛盾関係とするような意見も、②「安心のために安全を確保すべきだ」と安心を目的とし安全をその手段とすると思われる意見など様々みうけられます。

①は「天災は忘れた頃にやってくる」というような油断を戒めるスローガンとしていうのならわかりますが、「安心は安全の裏付けがなくてはならない」ということが直ちに、安心は安全にとって大敵で「安全を志向するには必然的にまったく安心を否定しなくてはならない」とすれば、それも極端にすぎます。

他方、もし②のように、安心が目的で安全はそのための手段であるとしてそれを両概念の関係であると定義するならば、安全はもっぱら幼な子のいけなさでなければ贅沢で非現実的なものを言うが、極楽とんぼを是とするものとならざるをえないでしょう。安全問題が深刻であればあるほど「安心できずとも安全でありさえすればよい」のであって、その上の安心を最初から考える余裕も必要もなくなります。

安全は客観的結果状態であり、安心は心のすなわち主観的状态であって、いわば安心は上部構造で安全はその基礎をなす下部構造です。したがって、目前の事態である危険を認識し必要な対策を講ずるためには、安全が志向されなくてはならず、安心志向をまづ言い立てることは二次的三次的問題を第一とする誤りに陥ってしまうことになります。安全願望はなんらか現実の客観的事態の認識に基づいて生ずるし生じている筈ですが、安心願望は危険を認識した上で志向しているのか、そうでなく現実に目を瞑ってのひたすらな安泰志向なのか、どちらかが問題です。安心を課題として設定することの誤りは、そのような現実に対応しているのか否か、区別しないところにあります。

解題 <安全のあかりとあかし> 3

このパンフレットを「安全のあかりとあかし」と名付けた理由を説明しようと思うのですが、これまでの「あかりとあかし」の説明が「あかり」と「あかし」のそれぞれの言葉の説明に少しばかり深くまで入り込んで、わかりにくいものとなっているので、今回はすこし具体例を交えながら、引き続き、なぜこの研究所の活動において、このパンフレットの名付けにも用いているようにこのように「あかりとあかし」についての考察を、重視するのかを説明したいと思います。

「あかり」と「あかし」をそれぞれ説明することは、「あかりとあかし」として直ちに二つの密接不可分な一つの関係の説明になっていかざるをえませんが、それこそがここでもしっかり述べておかなければならない安全学的態度の一つと言えます。できるだけ事柄を総合的包括的に捉えながら、しかも抑制的に本質、即ち勘どころを逃がさずしっかり把え、過不足のない抽象によって体系的分類範疇の中にしっかり位置づける総合的な類概念を形成しなければなりません。そしてそれが正に当代善知識達の深刻に心し、志してゆくべき新しく正しい安全学的姿勢なのでもあります。言い換えるならば真の学的態度であり学問的姿勢であるならば、学を重視する態度に徹し学問的姿勢を貫きながらも、決して学絶対、学問至上を主義的に妄想することがあってはならないということです。引込みの果ての否定的曲解もしくは偏行偏見で、引込み思案的で学者的な偏向習癖を止揚し正すべく、基本的で積極的で活眼的でありまた活如とした気にもちた生命的生活に時々もしくは時にはまなざしを向け直す姿勢がなければなりません。そしてそれはまたこの文章の流れの中に立ち返って言うならば当然、それぞれに説明してきた「あかり」と「あかし」が相互にどのような関係もしくは関連のものなのか明かすものとなることなのでもあります。

さて、先走りはその位にして、あかしや「あかし」の説明レベルに戻ってみればそれらにはそれぞれにまづ二種の別を立ててみるすることができます。

一般に仏前神前の「あかり」は「御(に)あかり」と言わずに「御(に)あかし」と言い、他方では参道などの屋外にあって、雨風の中でも欠かすことなく夜の闇を照らし続ける灯火を点(ト)しつづけるために石造の多い灯籠といった大規模な燈即ち灯などは「常夜燈」即ちあかり灯と言います。

何故一方に「あかし」と言い他方は「あかり」と

言うのでしょうか。先に答えを明かしてしまえば「あかり」や「あかし」は概念化、範疇化の前後の二つに、二種にわけて、そのもつ意味を考えることができますが、逆からみても同様に「あかし」は「あかり」の前のもとの後のものとの二つに分けて考えることができます。働きの面からみた意味の分析に重点をおいてこれを連続させると、いわゆる「経済」行為上の前号で述べた…… $W-G-W'-G'-W''-……$ という連鎖図になるのですが、基本的な生活形態としての自給自足の展開は $W-G-W-G-……$ ①、ますが、生活上の高度化は①のように W から始めても②のように G から始めることもできるのに対して、資本面からの地位向上は $G-W-G'-W'-G''-……$ ②と示せることになるわけです。ダッシュは次第に向上してゆくことを示すのですが、ダッシュのあるなしは要は生活をどのようなものとして考え営んでいるかの問題、言い換えれば価値観の問題にかかわるのです。

あかりはあかしの前後に接して前のも後のもともに他方のものの「あかり」となりながら現実の世の根源的「あかり」となるということが出来ます。しかし決して逆にあかしとなることによって世のあかりとなると考えるのは短絡による誤りと言わざるをえないのです。言い換えれば $W-W'-W''-……$ と続けてみるのが現実の生活の基本的あり方で $G-G'-G''-……$ と G を拾って連続させるのは正しくない考え方といわざるをえませんが、何よりも「あかし」とは「あかり」が真に「あかり」であるためのものでなければなりません。その行為としての「あかり」が意義を失うことなく意味的にみても真に外ならない「あかり」であるのでなければなりません。後に述べる証明の考察を先取りして言えば、真のあかしは論理的な証明であるのではなくて、直観的な実証こそが真の「あかし」であるのです。つまり「あかり」そのものこそが真にあかしのものです。あかしとしてのあかしはあかりの正統なあかり性をいわゆる「証明」的にあかすに過ぎないものといっても過言ではありません。言ってみればあかしは現前眼前のものが直接実による実の「あかし」であって、「あかし」そのものは現実からいったん離れて脳中の思想を引き出しこれとの符号を確かめるにすぎず、「あかり」こそが自らが真のあかしであることをあかしするものだということです。

<次号に続く>

— いつ誰が漁夫となるべきなのか —

フジテレビとライブドアが株式会社フジテレビの経営もしくは経営権をめぐる、形の上ではニッポン放送の株式会社の株主会の構成形態の問題として、今ホットな争いに入っている。しかし、残念ながら火事と喧嘩は何かの華とばかりに面白がってばかりはいられない。

俗に言えば、この争いは株の取得による会社の買収をめぐる問題であって、如何に美辞で飾ってもその実は狐と狸の化かし合いのようなものに外ならないということになるが、法政治的視点を入れて言い換えれば、日本の株式会社をめぐる商法関係の不備にまつわる資本主義の根源的かつ基本的問題であって、資本主義の時代的進展にともなって顕現した資本の運動中の様式の具体的な変化変遷に政治的対応が遅れ、古い形の理論的規制が及びにくくなり、奔馬的立上り資本は資本制下のエスタブリッシュとの間の死活の攻防の間であって、常識的統制の埒外に逸れ出て、あわや両雄による凄惨な **death match** にも立ち到ろうとする形勢になったのである。

これはもはや多くの世話物的高見の野次馬的な興味からの関心をかり立てる評論のようにしては済まず、かといって正しく **stakeholder** に外ならないものとして直接的渦中に巻き込まれてしまった本来安閑としてもありうる **stockholder** のように一喜一憂しながら血相を変えて、奔命に疲れ黄汗をしたたらせることなく、さらには傍観的冷静もしくは無為無心をもって他山の石とみて日本のこれからの資本 - 株式市場にとっての問題とばかり言って済ませておかず、NPO 法人安全学研究所の活動に関心を寄せて下さる方をして、後学の士の方々面々のために的確な剖見を提供しなければならない問題として、留意していただくべきポイントを取り敢えずお示しておかねばならぬという仕儀になったのである。

それというのも、ホリエモン現象を資本主義の現状の縮図として扱わず、そこにしばしの凝視によってくっきり浮かび上がらせることのできる未来像ならぬ将来像にどう対処するか、企業の安全をこえて文明社会そのもの文化存在的人間存在の安全そのものをどう考えるかをまた改めて新しく問い直さなければならないことになったからである。

美辞贅言を弄しいかがわしい企業経営の社会倫理性を担ぎ出して嘘つき狐のように人を小馬鹿に化かそうとはせず、金にはできないことがないとストレートに公言して憚らず、金色夜叉の悲哀とは無縁のように見えるホモ・エコノミクスのホリエモン氏の青年の客気に溢れたというか、純粹培養的というか、英雄的というか、極相的資本主義の極限に立とうという勢いの、無邪気で情(ココロ)なく俊秀の形相(ギョウウ)も凄まじい笑顔の形相(ケイウ)になって、資本機能の露骨な相の下に、理念なき理想の形の本質相を素直にみせるのだが、そのために、私達は一度立ち止まって売物としての安全を暫く控えて、内向きの安全点検に焦点をおき、安全の紛れなく意味するところを剔抉し、確認しなおす仕儀となったのである。

とにかく恐らく将来、日本でも遅かれ早かれ、あの笑顔の底にあるそれが新しい時代的展開の中、もしくは果てに現れるつまり多分、それは行き詰まり型のそれであると推測するのであるが、新時代資本主義の寵児は一個の有能なヘラルドなのである。現状において、既に、M. Weber の顕らかにした独立不羈の勤勉なプロテスタンティズムに由来する初期の資本主義の崇高な精神とは全くかけ離れてしまわざるをえないことを報せるのだが、起業といみじくも言い換えられ、**success** の業的持続性を捨てた一攫性の成功、成就是行雲とともにある自由な境界の遊子ならざるゲーム・ハンターのフォーチュン・ハンターとしての好き好み好き任せの遊士の企業家であると言わざるをえないのである。私達はプロテスタンティズムとの間に天地雲泥の懸隔を知り、その異質さをおもわざるをえない。

たとえそれが、遊びであり、我を忘れ夢中になることはあってもつまりは自覚的意識がなく、反省的態度が欠けているにせよ、夢遊病的行為でない限り、病的行為でなく、人格をもった、人としての存在者のそれに外ならないのである。言い方を換えれば、いわゆる「人間」性を備えて人間の中の一員に属し且つその一員である外ない人が「人」性的存在とも言える人物という物存在である以上、その人物存在者のなす行為もしくは行動は遊びという行為を、その行為をその行為である点に限りかつ即して抽象したものではない限りは、行為とまでは言わずとも少なくとも行動を展開し動作している物としての物実すなわち形相としての人格存在の裏づけを失うことはないであろう。しかしてそのときの決して空無でも虚妄でもないその物もしくは「もの」の物質的物実は何であろうか。平たくいえば、その存在者の存在の実は何であろうか。謎を深めるだけにしても直ちに言えることは、世間という **matter**、事柄としての **eventual** な **matter** でなく、**material** な **matter** でもないだろうということである。

matter を、**material** な **matter** を捨てて **eventual** な **matter** に移行させた彼らの手に任ねられて、彼らがリードする新しい型のそしてまた資本主義の究極的精粹形への資本主義の定着過程を実現してみせ、ついに魅惑幻惑された人をして、このままでほしい焦らせながらも、拱手したまま呆気にとられて成行きを見守り、或いは意外にもかえって心酔しては力を寄せて結果的に加速してゆかざるをえない破目に陥らせいつゆる **virtual** な世界を表出するに至るであろう。このときまた、質的異質性を失うことのなかった便宜便益は **profit** (裨益) に近づいてはその単一価値世界の中で利益からついに利潤となりゆくのである。

このような資本主義の趨勢の下で、私達の安全学研究所はまづは **NPO** 法人と認められ、そのように世にも広めたいと、その活動を世に曲がりなりに認められたいという願いも含めて世に打って出て正義の安全普及活動を本格的に展開しようとしている矢先に、私達は少し突っ込んだ考察ないし思索を披露し、存在と物実(モノザネ)の少々厄介な問題について、このときにかく簡潔な即ち舌足らずの物言いを敢えてしておきたい、おかざるをえないと思っている。

しかし、このパンフレットではまづ世の中への **profit** を行うべく **Non-Profit** 法人となった安全学研究所が利益もしくは利潤としての **profit** を否定する形の **Non-Profit** という俗称を戴いていることから、外してはならない根本的戒めを捉え損なわないように取り敢えず、**profit** について入り口程度のほんの概略を述べておくことにすれば、**non-profit** なるものは利潤とは言わずとも、利、利益を出さないという意味ではありうる筈がない。人が遊びでなく、意思のないし意図的もしくは意志的行為に及ぶ以上、そこに何らかの行為意味としての **merit** がある筈である。従って法人などにもみる人格と **material matter** としての物実の関係と **merit** の問題を深く掘下げなければならないが、ここで、そのような形而上的存在論にはにわかには立ち入るわけにはいかない。詳しくはホームページに譲ることしたい。 ❖

古希虹の途方にくれている日々

<第一回>

(2001年6月16日 涵徳亭の集い

…農大と日本国と人間世界をすべて一つにして…

で配布した文章の収録)

辛島司朗

プロローグ

定年退職ということで、給与に裏付けられた制度教育の場での勤めを一切了え、活動の本拠地を大学の研究室と教室から自宅に戻し、毎日家にいられる形、いる形となった。

しかし、発熱をおしての、長々と続く研究室明け渡しにともなう引越し作業の疲れと慣れず習わぬ肉体労働のために腰をしたたかに痛めてしまって、譬えて言えば何やら翼を傷めてしまったようでもあるが、考えてみればそれはそれだけのことでなく、そもそも大学は鶉籠のようなもので今の私はそこに長く囚れて、力いっぱいどこるか羽搏こうにも羽搏けず飛ぶに飛べなくなった籠の鳥のその哀れな末期の姿だったりするのもかも知れない。

通い慣れ見慣れた正門と本部棟の間、本部棟と図書館との間に亭々とメタセコイアを佇立させ、まったく同じような景色のままにありつづけて行くだろうのんびり農大、少なくとも外観は悠揚として空を指して開けているかのように見える東京農業大学と対照的に、いま、鬱々と窟踞して、飛翔を志向する精神の感じている抑圧は相当なものだ。退職に当たっての小文をきっかけに、何かを書こうと気力を振るい立たしているのも、五月の連休をとうに過ぎての今日が初めてで、二十日までという大学報との約束は間違いなく一つの救いだ。

一、問題関連

・ **虹と産婆的教育と医療**……職業教師の看板を、負載はせぬものの、腹背に帯びて三十年の余、私は「単位」目当ての配当「学生」を正式な相手として、年々何をしてきたのだろうか。知識ではなく批判をと謳い訴えながら、実際には決して知識を与えなかったわけではない。むしろ必要に迫られて、過剰なほどの知識と常識否定を盛り込んだのではなかったか。端的に言えば、教養的知識少なくとも詰め込み式形成 **information** 教育のためではなく、真の教育のため自己啓発 **self-cultivation** のための種蒔きのつもりであったが、いわゆる体系別の知識領域を無視し、教科書的取扱いを拒否して、一部の人々の敵意を惹き起こし怒りをかいながら、基礎知識をその都度補うところからはじめつつ、正しい知識の取得方法と単なる「学」とは異なる「学問」の根底的意味を理解してもらおうとしていたのであった。

education は積み込み、詰め込み、刷り込みと違って、< **educ**e 引き出す > ことであり、それこそが教育のある

べき姿とされてきた。それは佐々木邦先生などが **commencement** と一緒にユーモア仕立てで夙に論じてきたところだが、しかしそれをもう一步突っ込んでいけば、真の教師のあるべきはお助け婆さんとしての姿であって、その仕事は産婆術ないし助産法のそれなのでなければならぬと言うべきことになる。

「引き出し」と言えば、戦後一時、陰圧具を用いた強引な吸引分娩、鉗子を用いた引き出し分娩が医師によって行われた時期があった。しかし母や子はただの物ではない。じっくり時を待つのが本則であり、タイミングを測り、万事そのための条件を整えるために図ることこそが上の上の産婆のなすところでなければならぬであろう。「強引のわざ」は何にかぎらず、下の下のことであるのは言うまでもないが、そのような強引な引き出し分娩は誤った原理にもとづくもの、産業経済的で効率万能的な発想のしからしめるものであり、謝っても謝り切れない医療過誤の一つである。医術が仁術を標榜する算術にすぎないといわれ、「鬼手物心」もしくは「魚心掇(イ)心」とでも言うしかないような広くいきわたっている悪徳の典型例の一つであって、単に個々の医師の心掛けの問題には尽きるものなのではない。医学が医療についての認識を根本的に正し、医学そのもののあり方をも深刻に反省し、医者とは医師としての重い責任を自覚し、それを正にそのこととして記憶しなければならない問題なのである。助産の趣旨からすれば、そもそも医師が主人公となってしまっているのが思い上りなのである。

私のことに話を戻せば、「憤せずんば啓せず」という孔子様のご託宣を行ってきたのであるが、私としては佐藤一斎のであったと思うが、「憤之一字は進学の機関なり」という判断を根拠とするものであった。とにかく発憤してもらおう、自己啓発を助け必要な手引きぐらいをしようとして、どちらかといえば謙虚な姿勢と自分では信じているが「排(ヒ)せずんば発せず」とばかりにかなり強く挑発もしていた。それが、他にむかって烈しい非難を浴せるものとしての非難をかえって我が身に蒙らせることになったようなのであるが、雉も鳴かざれば撃たれまい、嘔む気のない虻も五月蠅くしなければたたきのめされまいとは承知していても、鳴かなければ人に、従って真正の学生に知られることもないのである。「君に忠ならんとすれば親に孝ならず」式の古臭いジレンマとも言えるが、私がソクラテスを仰ぎ見、カントに従いながら教えようとしたのは非難ではなく正しい学問の姿勢である批判態度であった。

しかし、啓発は外からの押しつけだけでは無理で、本来自発内発のものでなければならぬのである。韓国の「三一萬歳」が、運動としては間抜けなほどの非暴力的なものでありながらも、とにかく燎原の火のように拡がったのは何故か、何故ロシアの「ウ・ナロウド」は失敗に終わったのか。内に外圧と対抗する気概が有ったのと無かったとの違いではないのか。

2. 農業・農学と農大

農大についていえば、実学主義を標榜すると同時に旧制時代から既に「大学」であった農大の鼓吹する「農」の精神や神髄といったものの成否、逆にいえば「実学」の内実は、実はそのへんで分れるに違いない。一方で学説絶対に対する批判に立ちながら、他方では技術至上主義的実用技術を排し、そのためにまたただの体験万能的な講習会的啓蒙をこえ、しかもひたすら速成教育もしくは単脳育成、したがってまた問答抜きの徒弟修業ではなく、科学的実証を忘れることなくしかも主体的人格的営為としての技術の意味の自覚を伴った技術知の習得こそが、その「大学」としての農大の寄付行為の確信である筈である。二兎を追って虻蜂とらざらないためには、恐らくそこについてのしっかりした自覚が必要なのではあるまいか。

3. 市場経済の競争と民族国家の闘い

それらを考える手がかりとして、市場・国家・民・戦争について少し考えたい。民族主義的国民国家と競争原理の市場主義産業の矛盾の克服は **catastrophic** な世界大戦まで引き起こしてしまった二十世紀以降将来に向って、もっとも切実に求められ、実現しなければならぬ真の課題であると考えられるからであるが、しかしこの際、「昭和」とそれをうけた「平成」の日本の元号はむしろ不気味な暗示を含むことを忘れてはならない。「平」が「平らげる」ことを含意するのは言うまでもないが、白川静は「和」が軍門の風を孕むものであることを教える。求めるものは媾和同和の和の嘗胆ではなく、諧和調和に外ならない蘇(ソ)の楽でなければならず、しかも狂気からの脱却覚醒後の「学問」こそ、現代のリュシストラテ—つまり女の平和的救世主を呼び出すものでなければならぬと思ふからである。 <つづく>

活動報告

「市民活動センターたちかわ」に登録

安全学研究所は2月下旬に、(社)立川市社会福祉協議会の関連団体である「市民活動センターたちかわ」に会員登録しました。平成16年10月13日現在、立川市に何らかの形で関わる117団体が登録しています。市民活動・NPO法人に関する情報提供、運営相談、講習、設備利用、助成などの便宜を受けることができます。

『安全探蹟』発刊準備のお知らせ

本研究所理事辛島恵美子の著書『安全学索隠』（八十年代出版、1986年）の刊行から20年近く経ちました。当時世の中では安全科学の必要が言い出されてきていましたが、辛島の『安全学索隠』にもとづく私たちの安全学研究所は科学の枠を超えて社会全体の見地にたち、凡そ文化の根底をなすものとして安全を考え、通俗的に矮小化され切っている安全概念を正すところから、安全学という新しい学問を始め、安全を現実的総合的にとらえ、普遍的安全理念を模索してきました。

『安全学索隠』の内容は今でも決して古くなっていません。安全学研究所ではその後も安全について地道に様々な研究を重ねてきました。

ここへきて、『安全学索隠』の後をうけて補完的關係に立ち、前著と呼応する『安全探蹟(初)』をぜひ発表したいと鋭意努力を重ねているところです。

今日殆ど知られず使われなくなっていますが、「索隠」や「探蹟」とこれを一貫して使いつつよとするのは、東アジア文化の根底にある易経の繫辞上傳中の「探蹟索隠」という言葉に思想的に深く依拠しているからです。

索隠は事象の中にこめられている隠れた意味を求めるという意味ですが、『安全学索隠』は個々の具体的場面における安全ではなく、そもそもの安全を明らかにし、逆にいえば何をもって安全とするかの探求を学的レベルにまで高めようとするものです。

他方、探蹟の蹟は偏に顎の意味を含みますが、探蹟となると、様々に絡み合う現実の事柄を細く噛み砕き解きほぐして精密に捉え、吸収することです。安全は通俗には怪我や被害がないなどの無事な状態を表す **safe** と同様に考えられていますが、体系的な分類の中でそれらの異同および種類関係などを知り、正しい行動の動因とすべきものが探蹟の期するところです。一応英語になぞらえるとすれば、**secure** に当てるのがましでしょう。

『安全探蹟』では、前回の『安全学索隠』で探し求めた安全学の考え方を基礎としてそれを発展させながら安全もしくは安全学を全 **holos** を整え安んずること即ち **holonomy** とし、様々な具体的問題の本質を探り、体系化する概論づくりをめざします。

できれば4~5ヵ月後の発行をめざしていますが大学などの教科書にも使えるものになりたいと思っています。

ホームページ開設のお知らせ

ホームページを取り敢えず、開設いたしました。詳しい説明は次号に譲りますが、アクセスの上、忌憚のないご意見、ご批判をお寄せ下さい。

『安全学索隠』と併せてお読みいただければ幸いです。勉強会へもふるって参加下さい。

嫌いなもの—「地方」という言葉

予告編

(私は) 地方という言葉が嫌いです。嫌いというよりむしろ時には嫌悪とでも言った方が当るのかも知れませんが、殆どはむしろもっと柔く否むに近いにすぎず、嫌いとか嫌なといっても逆に少し知的に響かせながら逆説的に露悪趣味の物言いをしているのであって、本当は違和感抵抗感のようなもので、「嫌」な類のものとか好きになれないものといっている類いのものというべき程度のもを言っているのかもしれない。私は幼い頃から静かで「おっとり」しているといわれることが多く、幼少時には烈しい感情の「嫌い」を経験した記憶が殆どありません。食物に好物は多々あっても、嫌うものはニンジンぐらいだったでしょう。それを除いてはトマトなども昭和十年にもなるまえからむしろ好きでした。

それは、女性が口にするときに吐き捨てるようにまた極めつけるように感じられるような、あまり積極的に嫌いといえるような、そんなものではなかったと言う方が正しい筈なのに、しかしそれなのにどちらかといえば今は大嫌いと言わざるをえない、そんな気持ちです。また時には実際にまたそんな気持ちにもさせられてしまうような時代状況になってしまっているのかも知れません。少し踏み込んで言えば、この言葉には嫌な昔の思いが、そうです、それもです、恐らく小学校五、六年から中学一、二年にかけてからのことだったと思いますが、今なお消し難くまとわりついていると、当るかも知れません。

しかし、そのような意味で今日における嫌いなものの一つとして「地方」にまつわる思いを述べて、中央-地方的対立と、分権の問題に及ぼしてゆこうとして一文を草したのですが、残念ながらこのパンフレットには載せず、ホームページに載せることにしましたので、ぜひお読み下さい。中央-地方的対立は、原則的に住民にウエイトのかかっている共同体と、対外的には主権存在体であるが、対内的には主権存在者としての国民を束ねている政府中心の支配組織体であり統一的な主権所有体としての国との、いわば家や近隣の延長としての自然的な親睦中心の共同体である **Gemeinschaft, community** と目的や機能もしくは利益社会としての **Gesellschaft, (society** および **state)** との弁別問題ですが、これは今日ゆるがせにできない問題ではないでしょうか。

◇ 理事・監事紹介

小堀 樹氏 : 弁護士。元日弁連会長で、現在も広く活躍中。

辛島恵美子氏 : 多角的な領域にわたって、論文・著作、翻訳や講演、討論などを通じて安全の本義を説く活躍をつづける。
現在、青山学院大、秋田大、東工大の学部、大学院などに出演。

津熊二郎氏 : 東農大卒の広い関心で世の中のこと、人のことを見てこられた一般的サラリーマン。奥様は高校の先生。

石上麟太郎氏 : 指導的役割を演じている大崎先生率いる八重洲法律事務所気鋭のパートナー弁護士。

ご助力ご参加のお願い

当研究所では従来、個人的な生活に密着した活動を行ってききましたが、そのような理論的研究のほかに実践問題にまで幅を広げるとすれば、それなりの新しい活動を維持するために費用、労力が大きくなることとなります。まだ本格的活動にいたっておらず、助成は勿論出版など活動自体から収入のえられない過渡的段階ですので、やや過大な負担を負い、またお願いするような次第ですが、ぜひ、会員として、またこのパンフレットへの投稿その他いろいろな形で有志の方々や活動中の方々の参加や援助・ご支援をお願いいたします。

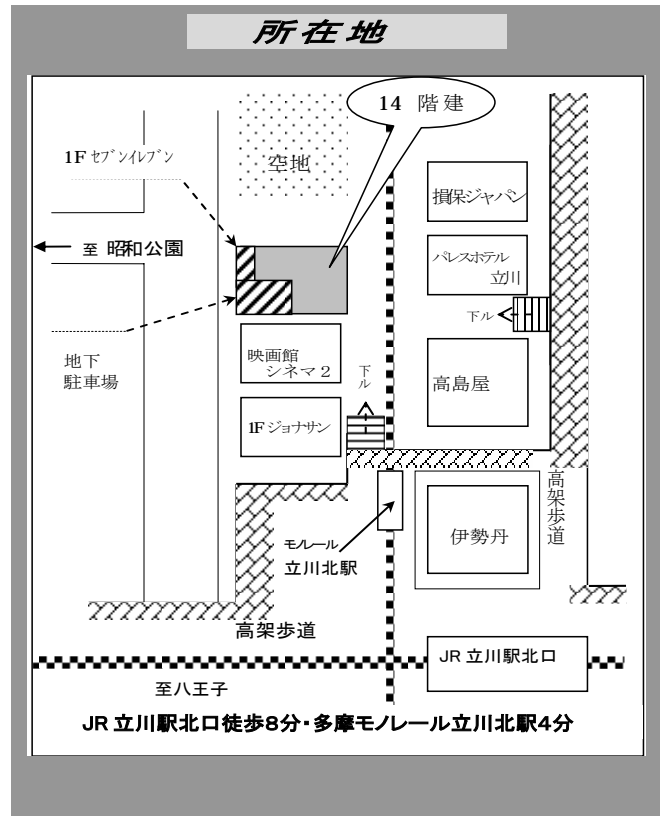
新しいこの研究所で、揃って一緒に第一歩を踏み出していただける方々の参加を心からお待ちしております。従来、安全問題に関心をおもちで活動している方にはその経験を持ち寄っていただければありがたく、またとくに安全問題に関して活動をしたことのない方も興味をおぼえ活動してみたい方もぜひご参加ください。

今後の参加者の増加によって過大な負担を軽減しながら、皆様の経験によるご意見やご忠言、ご叱責によって様々に改善の工夫、努力を重ねて参りたいと思っております。

***** 編集後記 *****

- ◆ 今号では、第一号に続いて、役員の方々の津熊、石上両氏にも原稿をお願いいたしました。何分紙幅が少ないため、十分に論を展開していただくこともできず申し訳ないことでした。津熊氏の論考は経済の面での安全を強調するばかりでなく、もっと全的な文明の安全ということを書いておられます。また石上氏の論考は明示的にはありませんが同様に、単に状態としての safe、safety を受動的に待つのではなく、安全 holonomy の意味にまでは及ばないにしても、まだまだ消極的ながら英語ならば secure に当たる面を忘れてはならないといっているものと考えられます。国際的な問題を含みませんが、基礎的な生活に即してすべてを全的に考えてゆくことが、Homeland Security という意味と考えてよいのではないのでしょうか。これは従来いわれていた「神は自ら助くるものを助く」という言葉に通ずるものと思われれます。勿論 Homeland Security はその自国のために先制攻撃を容認する論理に基づいてはならず、戦いでなく平和 (peace 講和) を基軸にして展開してゆくべきものですが、今後、ホームページ等でしっかり探究してゆくことにいたしましょう。
- ◆ 今号では紙面を増やし、急遽、いま論議の喧しいホットな話題であるライブドア-フジテレビ問題を素材に取り上げて、現代社会において追求される利益とは、NPO 法人の提供しようとする利益とは何なのか、何であるべきかを考え合わせながら問い直す論考を掲載しましたが、詳しい展開は、書かれていますようにホームページに譲っています。ぜひご覧ください。
- ◆ 上に述べた理由から、先号まで二回連載していた「をにが」問題は申し訳ありませんが、今回休載させていただきました。持ち越している問題は「を」の問題と、〈解題 あかりとあかし〉欄の論中の言葉の説明を、日本語の問題として改めて採り上げ直す「あかる」と「あかす」の「る」「す」の問題ですが、次号に続ける予定です。
- ◆ 〈古稀蛇の途方に暮れている日々〉は4年前の辛島氏の定年退職時に書いた文で、かなりの方にお配りしているものでご存知の方も多いかと思われましたが、医療や教育、市場経済、歴史や文化の現代的あり方を問題を深く掘り下げて反省して批判し、安全理念に基づく判断、見識を示すものとして、準備号に相応しいと考えて掲載したものです。
- ◆ NPO法人となることによって、いろいろ団体との交流が生まれつつあります。皆様もどうかご参加ください。現在、この便りは250部ほど配布しています。どうか、ご寄稿をお寄せ下さい。

(M.S.;N.N.)



	現在の暫定的会費 (単位:円)	
	入会金	月会費
正会員	12,000	3,000
賛助会員	一口 10,000	4,000
学生会員	1,000	1,000